庭園 協会ニュース 第67号

社団法人 日本庭園協会
東京都新宿区西早稲田 1-6-3 福田ビル 301
〒169-0051　TEL:03-3204-0595（FAX 兼用）
E-mail: gsj20@m7.dion.ne.jp　URL: http://nitteikyou.org/
編集者：広報委員長・柴田 正文／委員・小沼 康子、加藤 精一
題　字：故・上原 敬二
発行日：平成 24 年 1 月 22 日

朝霧高原から望む富士山（撮影・大平 暁）

東北の景勝地の復興を期待する

粟野 幹夫

未曾有の被害をもたらした三月十一日の東日本大震災、死者・行方不明者数約二万人、家屋被害二十七万戸以上、道路、堤防、鉄道、ダム等々被害総額は十六兆から二十五兆円と試算されている。その中には我々が愛した景勝地も含まれているのだろうか…風光明媚で知られた陸中海岸国立公園、自然生物の特別保護地区仙台蒲生干潟、砂州作用によって作られた福島松川浦自然公園等々、壊滅的な被害を被った。

岩手県陸前高田の名勝「高田松原」は、約三百五十年前に防風林として赤松、黒松が二キロに渡って植えられ、石川啄木の「一握の砂」にも詠われた美しい白砂松原であったが、七万本の松の内たった一本を残して消滅した。この松は「奇跡の一本松」として話題となり枯れないよう手当がされているが、まだまだ注意が必要な状態である。

宮城県仙台蒲生干潟は、七北田川上流のダム建設や仙台港建設で流れが変わったおかげで出来上がった干潟であるが、浅瀬に広がる葦原は美しく、そこから飛び立つ水鳥は写真家の絶好の被写体となっていた。貴重鳥類や水生生物も多く棲み自然の宝庫になっていたが、津波によって壊滅状態になってしまった。

福島県松川浦は緩やかな流れの宇多川から運ばれた砂が砂嘴となって出来上がった潟湖であり、浦内には大小いくつかの島々が点在し、小松島とも称される景勝地であったが、ここもまた津波により壊滅的な状態となった。またこの地域は原発事故の影響もあり、まだまだ復旧作業が進まず惨憺たる状態のままである。

宮城県の日本三景松島は幸いにも島々が津波を受け止めてくれたおかげで被害が少なく、岩手県宮古浄土ヶ浜も多少の被害はあったが乳白色の切り立った岩場とその上の松の美しい景観は損なわれず、十一月十八日の文化審議会により景勝地に指定された。インフラの整備や放射能の除染作業など、まだまだ大変ではあるが、景勝地へも公的資金を導入するなど、美しい東北の自然の復興にも期待したい。（東北支部長）

※奇跡の一本松は日本緑化センターにより「蘇生は絶望的」と発表された（十二月十三日）

鑑賞会　秋季見学会【神代植物公園・滄浪泉園・殿ヶ谷戸庭園】

藤枝 修子

来の姿が見えてくることがあるが、それを本当に形にすべきなのか？庭も生きているという当たり前のことを考えずに、いつの時代に戻して文化財の価値を上げるのかを考えていたのですが、「オーナーが変われば庭も変わる」「園路は最大の変化」「今の姿が基本」「古ければ良いというものではない」と先生からお話をして頂き、復元するに当たり視点をどこに置くのかを考え実践していかなければいけないと感じました。

途中東日本大震災があり大変な時期に半年以上に渡り、お忙しい中、貴重なお話をして頂いた講師の方々、事務局の皆様にお礼を申し上げます。

（東京都支部正会員）

神代植物公園・高橋康夫園長の解説で園内を回る

平成二十三年十月二十六日（木）八時五十分、新宿西口に参加者二十八名が集合し、晴天のもとで「国分寺崖線・湧水と庭園」をテーマに神代植物公園・滄浪泉園・殿ヶ谷戸庭園の見学会をスタートした。バスの中で、河原武敏氏により見学先の説明が行われた。東日本大地震の影響で、今回は都内の見学先が選ばれた。

開園五十周年の東京都立神代植物公園に着き、高橋康夫園長に迎えられた。植物会館で公園の全体的な説明を受けた。東京の街路樹などを育てる苗圃であったが、戦後、神代緑地として公開された。昭和三十六年に神代植物園に名称変更、都内唯一の植物公園として開園。約四千八百種類、十万本・株の樹木が植えられ、種類ごとに三十ブロックに分けてある。

さつき・菊の盆栽、色鮮やかなダリア園と香しいバラ園をめでながら広大な園内を散策した。続いて隣接する深大寺（天台宗別格本山浮岳山昌楽院深大寺）に参拝した。本堂は平成十五年に改修され、ご本尊の阿弥陀如来は鎌倉時代前期の作。昼食には会席料理で深大寺そばをいただいた。そばの由来は、米の生産に向かない土地がらから、江戸時代にそばを栽培して寺に納めたとのこと。

殿ヶ谷戸庭園・紅葉亭からの眺め

昼食後、バスで小金井市滄浪泉園へ。国分寺崖線崖下の砂礫層から湧き出る地下水（はけ）が何箇所かあり、鬱蒼とした樹木に囲まれた池の水は野川に至る。園内に水琴窟もある。明治・大正期に活躍した波多野承五郎（雅号・古渓）の別荘であり、大正八年犬養毅元首相がこの庭に遊び、命名した。

見学地最後の殿ヶ谷戸庭園（国指定名勝）へ。JR中央線の国分寺駅南口前に位置し、武蔵野固有の自然地形「谷戸」を利用した庭園として昭和五十四年四月に開園した。大正二～四年江口定條（旧満鉄副総裁）の別邸として建てられ、昭和四年岩崎彦太郎（旧三菱財閥）、昭和四十九年東京都が買収した歴史がある。国分寺崖線の崖上の平地は芝生地、崖下の湧水を利用した渓流と池を巧みに調和させた林泉回遊式庭園である。園内には、大正から昭和初期の特徴をもつ和洋折衷式の別荘建築物（現在は管理事務所に使用）と茶室の紅葉亭がある。

高層建築物に囲まれながらも、地域住民や関係者が守りぬいて生き続ける都会の庭園に、その重要性を痛感した。陽も傾き、予定の見学を終えて、満ち足りた気持ちで帰途についた。

（鑑賞会正会員）

神代植物公園・バラ園、大温室を背景の参加者

新しい年を迎えて思うこと

金子 直作

新年明けましておめでとうございます。

新春のご挨拶を申し上げますが、十二月末を決算月といたしております本協会といたしましては、年明けと同時に新年度となり、本部では三月の定例総会に向けて準備を始めております。総会が近づくにつれ、昨年の定期総会の日、三月十一日、東日本大震災を思い出します。丁度、明治神宮文化館において定期総会が行われ、日本庭園協会賞授与式の時に大きな揺れを感じ、全員屋外に避難しました。その後、安全を確認し最後まで開催したものの、ご出席くださった方々の帰宅も困難な状態で大変だったと伺っておりますが、何より東北をはじめ震災の被害を受けられた会員の方々には心よりお見舞い申し上げます。

さて、この一年を振り返りますと、東日本大震災の影響等で一部の活動を中止したり、困難であったにも関わらず、研修会、見学会等、様々な活動をしていただきました。本部においても「伝統庭園技塾」「庭園技術連続基礎講座」は講師の方々や担当者のご努力により、例年のように行われました。鑑賞会企画の、春・秋の庭園見学会も開催されました。今年度も、各支部の活発な活動予定を聞いております。龍居会長が常にお話されている「本部と支部の連携」に基づき、各支部の様々な企画や支部間の交流など、皆様方の本協会への思いが十分伝わってまいります。また、今年は「国際日本庭園シンポジウム」がオーストラリアで開催されます。海外での開催は平成二十二年のアメリカサンディエゴに続く開催ですが、ご担当の関係者、ご参加下さる方々におかれましては、準備など大変かと存じますが、是非とも広く海外と交流され、日本の伝統の技を海外に広めて下さいますよう祈念いたしております。「庭園基礎講座」も昨年に引き続き開催される予定ですが、日本庭園の啓蒙、伝統庭園技術の継承として毎年、若い会員の参加も多く、今後の若い世代の方々の活躍を楽しみにしております。

本年度は新法人化に向けての移行の年でありますが、理事をはじめとする皆様方のご協力のもと、円滑な組織の運営を行い、益々会の充実を図るために、是非とも会員各位に会の活動をご理解いただくと共に会員を増やし、会の拡充を目指していきたいと存じます。どうか皆様、ご協力くださいますようお願い申し上げます。

（副会長）

第三回 庭園技術連続基礎講座の報告

平成二十一年秋にスタートした、連続五回の庭園技術連続基礎講座も第三回目が終了いたしました。午前は「庭との対話」と「先人に学ぶ」という講義二本だて、午後は庭園実地見学という構成でした。今回も定員いっぱいの申込者があり講師陣と熱心な受講生達とのやりとりや受講生同士の交流がありました。内容を振り返り、参加した受講生の感想を掲載いたします。

第一回　二月二十七日（日）
「人間と向き合う」高橋良仁氏／「庭園協会創設者たちの作庭」／龍居竹之介氏／「東京 千鳥ヶ淵戦没者墓地」小沼康子氏

第二回　四月二十四日（日）
「水と向き合う」廣瀬慶寛氏／「吉村巌の作庭」與五澤廉司氏／「東京小石川後楽園」龍居竹之介氏

第三回　五月二十九日（日）
「植物と向き合う」金綱重治氏／「大胡隆治の作庭」大胡周一郎氏／「横浜大胡邸」大胡周一郎氏

第四回　六月二十六日（日）
「添景物と向き合う」平井孝幸氏／「重森三玲の作庭」斉藤忠一氏／「東京 福泉寺」斉藤忠一氏

第五回　八月七日（日）
「石と向き合う」上野周三氏／「田中泰阿弥の作庭」三鍋光夫氏／「鎌倉尚半亭他」三鍋光夫氏

受講して思ったこと

石塚 義教

二月二十七日に始まったこの講座は、三・一一東日本大震災の発生で最初の予定より遅れて八月七日に五回に亘る全講座が終了しました。

私は講座を受講するにあたり、期待に胸を躍らせていました。それは、日頃得られない多くの知識と情報を、練達の講師陣から聴講できること、全国の庭職の方々との交流です。

開講に先立ち、龍居会長より「完走することが大切」との激励を受け、大いに鼓舞されました。

「庭との対話」では、観る人が違和感無く素直に愛でることができる庭、施主様の望む庭をどのように具現化するか、満足を得られる提案をどのように行なうかは、作庭に携わる者としては、絶えず念頭に置かなくてはならない要件であると考えます。「人と向き合う」は、作庭上の基本的な姿勢を強調され、まさに目から鱗が落ちるおもいでした。

創設者達の作庭を語る龍居講師

「水と向き合う」について質問を受ける廣瀬講師

「水と向き合う」「植物と向き合う」「添景物と向き合う」「石と向き合う」の講義も魅力的でした。樹木・草類も石も、自然の山野から庭に移したときから、人の手が加わり純粋な意味での自然からかけ離れてしまったと言えます。しかし、それらの材料を用いて大自然を縮景的に表現した時、新たな美と価値が生まれ、人への安らぎが生まれることになります。そして、作らせる側（施主）と作る側（作庭者）の共通の満足と喜びが得られた時、何物にも代え難い至福が生ずるのではないかと考えます。

水・植物・石等の諸材料は、作庭者の理想像を具象化するために重要ですが、その素材の美しさをいかにして引き出すことができるかは、作庭者の技倆が問われるところで、自然の景を常に見つめ続ける態度が大切であることを納得した次第です。

「大胡隆治の作庭」について語る大胡周一郎講師

「庭園実地見学」では、先人の感性に直接的に触れ、業績を知ることができて大収穫でした。龍居会長の詳細な解説は聞き逃せないと思い、なるべく近くで拝聴したつもりでしたが、拡声器などの工夫を事務局でご検討いただきたいところです。

私は、横浜の大胡邸で拝見した「筑波石」の魅力から逃れられず、遂に茨城県石岡市まで材料を求めに長駆しました。ここで求めたやや小振りな5個の筑波石は、それぞれの趣を持って施主様の庭に納まっています。

庭の作業では、当然ながら技法が重要ですが、私もさまざまな技法に大きな関心を持っています。中でも重厚長大な材料の運搬、吊り上げ等の作業は、今日では優秀な重機を用いることができますが、重機が入らない場所における工法として、古来の人力による工法について研修会を開催していただきたいと願っています。

連続講座では全国の熱心な仲間から、知恵と元気をいただきました。そして、龍居会長を始め講師の皆様の熱い講義に感謝いたします。

大いなる収穫が得られました。今後の実務に役立てて、精進を重ねる思いを強くいたしております。

（新潟県支部正会員）

東京で唯一となった重森三玲作庭の福泉寺庭園

参加して感じたこと

北村 均

この講座では文化財庭園の維持管理の仕事に関わる中で、自分自身庭師として足りない面を少しでも埋められることが出来ればと思い参加しました。

「庭との対話」では、人・水・植物・添景物と向き合うというテーマでそれぞれ第一線で活躍する方々から貴重な話を聞くことが出来ました。今まではきれいなものはきれいで言葉にするのは野暮だと思っていましたが、感動して心動かされる風景がなぜ感動するのかを分析して引き出しに入れること、そしてその引き出しを沢山持つことが大切だと聞いて、ただ単に感動するのはアマチュアで、それを分析し言葉にして形にするのがプロだと感じました。「庭園実地見学」では、見学の庭園にゆかりのある講師から興味深い話を聞くことが出来ました。中でも自分の仕事に直接関係のある小石川後楽園に於いては、龍居先生より大泉水護岸修復工事の現場に入り、この調査で分かったこと等、貴重な話を聞くことが出来ました。その中で調査により庭本

田中泰阿弥作庭の尚半亭庭園を観賞する受講生